

尋常小學修身書

文部省

複式編制學校
第三四學年兒童用



K130.1 1

3

3.4乙

複式編制學校
第三四學年
兒童用

尋常小學修身書

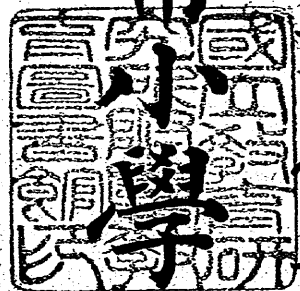
文部省



複式編制學校
第三四學年
兒童用乙

尋常小學
修身書

文部省



もくろく

第一	おやのおん	一	第十四	皇后陛下	三十九
第二	かうかう	三	第十五	皇室をたつとべ	三十一
第三	兄弟	五	第十六	能久親王	三十四
第四	仕事にはげめ	七	第十七	ちゆうくんあいこく	三十七
第五	しんるゐ	九	第十八	やくそくをまもれ	四十
第六	がくもん	十一	第十九	あやまちをかくすな	四十二
第七	友だちはたすけあへ	十三	第二十	おんをわすれるな	四十三
第八	身體	十五	第二十一	法令をおもんぜよ	四十六
第九	めいしんにおちいるな	十七	第二十二	共同	四十八
第十	よい習慣をつくれ	二十	第二十三	こころえき	五十
第十一	そせんをたつとべ	二十三	第二十四	じぜん	五十四
第十二	ぎやうぎ	二十五	第二十五	よい日本人	五十六
第十三	人の名譽をおもんぜよ	二十七			

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克
ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セル
ハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實
ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及
ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器
ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲
ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉

シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫
臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬
ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ
拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

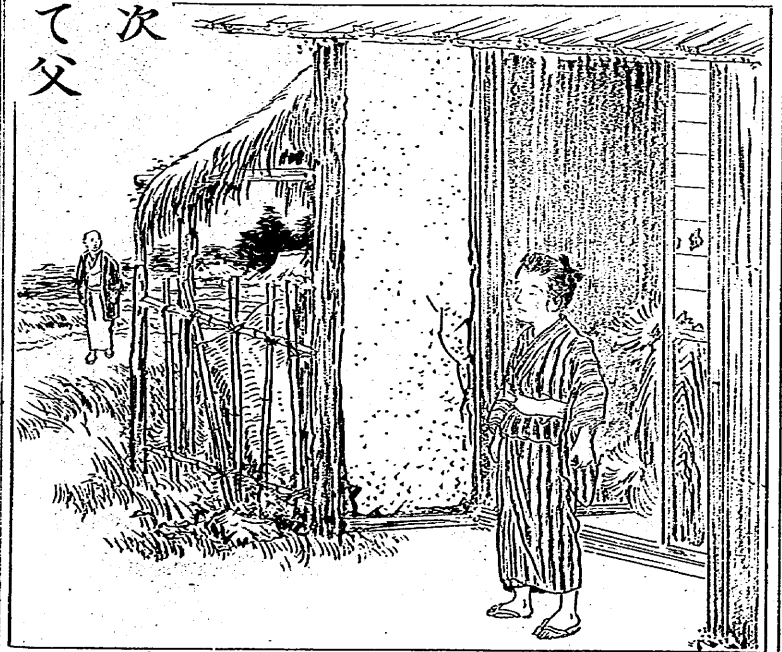
御名 御璽

第一 おやのおん

二宮金次郎にのみやきんじろうの家は大そうびんぼふであつたので、父母は金次郎たちをそだてるために、いろいろくらうをしました。

ある時父がびやうきになつて、おいしやにかかりました。父はくすりのおれいが出来ませんので、しかたがなく、でんぢを賣りました。びやうきがなほつてから、父はおいしやの家へおれいに行き、その金を出しましたが、おいし

やは氣のどくに
思つて、うけ取り
ません。父はおい
しやのしんせつ
をよろこび、しひ
てそのはんぶん
をおいてかへり
ました。その時金次
郎はかど口に出て父



のかへりをまつてゐました。父はうれしさう
なかほをしてかへつて来て、金次郎においし
やのしんせつをはなして聞かせ、「これでおま
へたちをそだてる」ことが出来る。」といひまし
た。

父母ノオンハ山ヨリモ高く、海ヨリモフカ
シ。

第二 かうかう

金次郎は小さい時から父母が自分たちをそ

だててくれるくらうを思ひやつて、よく父母の手だすけをしました。

金次郎が十四の時、父がなくなりました。母はくらしにこまつて、すゑの子をしんるゐへあづけましたが、その子のことをしんぱいして毎ばんよくねむりませんでした。金次郎は母の心を思ひやつて、「私が一しよけんめいにはたりますから、弟をつれもどして下さい」といひました。母はよろこんでそのばんすぐに



しんるゐの家へ行つて、あづけた子をつれてかへり、おや子一しよにあつまつてよろこびあひました。

孝ハ徳ノハジメ。

第三 兄弟

それから金次郎は少しのじかんでもむだにせず、

よくはたらい
て弟たちをや
しなひました。
金次郎は朝は
早くから山へ
行き、しばをかり、た
きぎを取つて、それ
を賣りました。又夜
はなはをなつたり、



わらぢを作つたりして、おそくまではたらき
ました。

兄弟ハリヤウ手ノゴトシ。

第四 仕事にはげめ

金次郎は十二の時から父にかはつて川ぶし
んに出ました。仕事をすまして家へかへると、
夜おそくまでおきてゐて、わらぢを作りまし
た。さうしてあくる朝そのわらぢを仕事場へ
持つて行つて、私はまだ一人前の仕事が出来



八
ませんので、皆様のおせ
わになります。これはそ
のおれいです。」といつて、
人人におくりました。
その上、金次郎は人人の
やすんでゐるひまにも、
土や石をはこんで、力の
かぎりはたらきました。
それでかへつて、おとな

よりもたくさん仕事をしたと申します。

第五 しんるゐ

金次郎が十六の時、母がびやうきにかかりま
した。金次郎は大そうしんぱいしていろいろ
かいはいしましたけれども、とうとうなくな
りました。金次郎はたのみにする母にわかれ、
二人の小さい弟と後にのこつてどんなにな
げいたでせう。

やがてしんるゐの人たちがよりあつて、「三人

のものが大きくなるまで、わけてあづかることにしよう。』とさうだんしました。それで二人の弟は母のさとに引取られ、金次郎はまんべんといふをぢの家へ行つて、せわになりました。



第六 がくもん

金次郎はよくをぢのいひつけをまもり、一日はたらいで、夜になると、本をよみ、字をならひ、さんじゆつのけいこをしました。をぢはあぶらがいるのをきらつて夜學をとめましたので、金次郎は自分であぶらなを作り、そのたねを町へ持つて行つてあぶらに取りかへ、毎ばんべんきやうしました。をぢが又「本をよむよりはうちの仕事をせよ。」といひましたから、金

次郎は夜おそくまで家の仕事をして、その後でがくもんをしました。金次郎は二十さいの時自分の家へかへり、せい出してはたらいて、後にはえらい人になりました。

玉ミガカザレバ光ナ

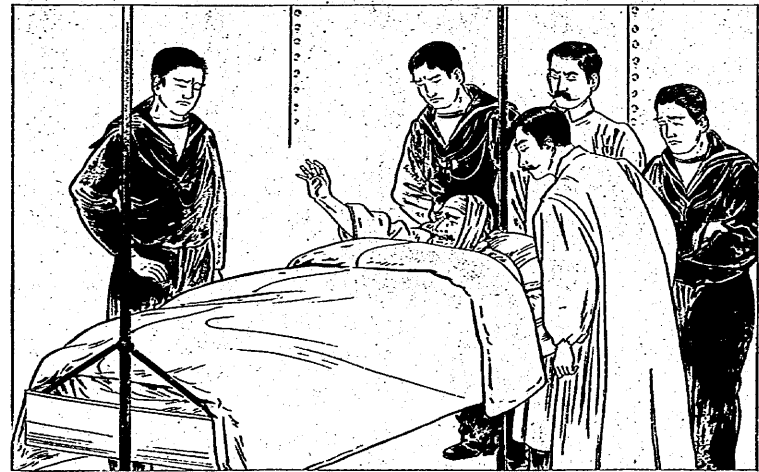


シ。人學^{マナ}バザレバ智^チナシ。

第七 友だちはたすけあへ

海軍^{かいぐん}一とうすゐへい坂井^{さかい}定三郎^{ぢやうざぶろう}は、ぐんかんにゐた友だちがべんきやうのために大阪^{おほさか}へ行つたので、自分のきふれうの中から時時金をおくつてたすけてやりました。明治^{めいじ}三十八年五月、日本海のいくさのあつた少し前にも、金をおくらうとしましたけれども、つがふがわるかつたので人からかりておくりました。

間もなく定三郎はいくきに出ておもいきずをうけました。とてもたすかるまいと思ひましたので、そばにゐた友だちに、かりた金のしまつをたのんで、それきり氣が遠くなつてしまひました。しばらくすると、には



かに大きなこゑで大阪の友だちの名をよび、「じつかりたのむぞ」といつて、そのままなくなりました。

第八 身體

伴信友はつねにけんかうに心がけました。毎日朝おきた時と、夜ねる時に姿勢をただしくしてすわり、三四十ぺんもしんこきふをし、又毎朝つめたい水であたまをひやしました。その外、朝はん弓を引いたり、はをつぶした刀を



ふつたりして、よく
うんどうしました。
かやうに信友は身
體をたいせつにし
たので、年をとつて
もちやうぶで、たく
さんの本をあらは
すことが出来まし
た。

すべて身體をぢやうぶにするには、姿勢に氣
をつけ、うんどうをおこたらず、着物はせいけ
つにして、あつ着や、うす着にすぎないやうに
し、ねむりとしよくじは、きそくただしくしな
ければなりません。又からだをきたなくして
おくとびやうきがおこりやすく、うすぐらい
所で物を見ると目をいためます。

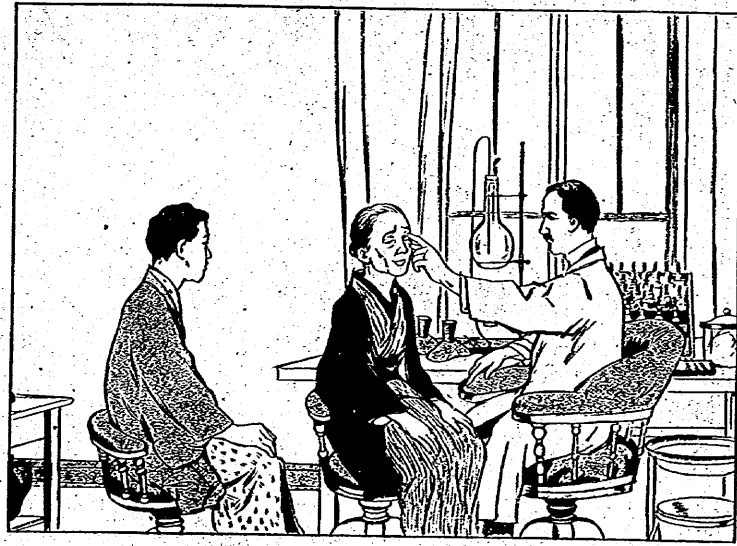
第九 めいしんにおちいるな

ある町に目をわづらつてゐる女がありまし

十八
た。めいしんのふかい人で、かねてある所のお
水が目のやまひによいといふことを聞いて
ゐたので、それをもらつて來てもちひました。
けれどもやまひは日におもくなるばかりで、
何のしるしも見えませんでした。

ある日しんるゐの人が見まひに來て、おどろ
いて、むりにおいしやの所へつれて行つて見
てもらはせました。おいしやはしんさつをし
て、「これははげしいトラホームです。右の目は

手おくれになつてゐ
るので、なほすことは
出來ません。左の目は
まだ見こみがありま
すから、しゆじゆつを
して見ませう。これも
今少しおくれたら、手
のつけやうもなかつ
たでせう。」といひまし



た。その後しゅじゅつをうけたおかげで、左の目はやうやうなほりましたが、その女は「自分のおろかなため、だうりに合はないことをしんじて、まつたくのめくらにならうとしました。おそろしいのはめいしんでございます」とつねづね人にはなしました。

第十 よい習慣しふぐんをつくれ

よい習慣をつくるにはつねに自分をふりかへつて見て、よいおこなひをつとめ、わるいお

こなひをきけなければなりません。瀧たき鶴かく臺だいの妻つまがある日たもとから赤いまりをおとしました。鶴臺があやしんでたづねますと、妻はかほをあかくして「私はあやまちをしてこうくわいするこ



とがとうございます。それであやまちを少くしようと思ひ、赤いまりと白いまりを作つてたもとへ入れておき、わるい心がおこる時には、赤いまりに絲いとをまきそへ、よい心がおこる時には、白いまりに絲をまきそへてゐます。はじめのうちには赤い方ばかり大きくなりまして、たが、今ではりやうはうがやつとおなじほどの大ききになりました。けれども白いまりが赤いまりより大きくならないのをはづかし

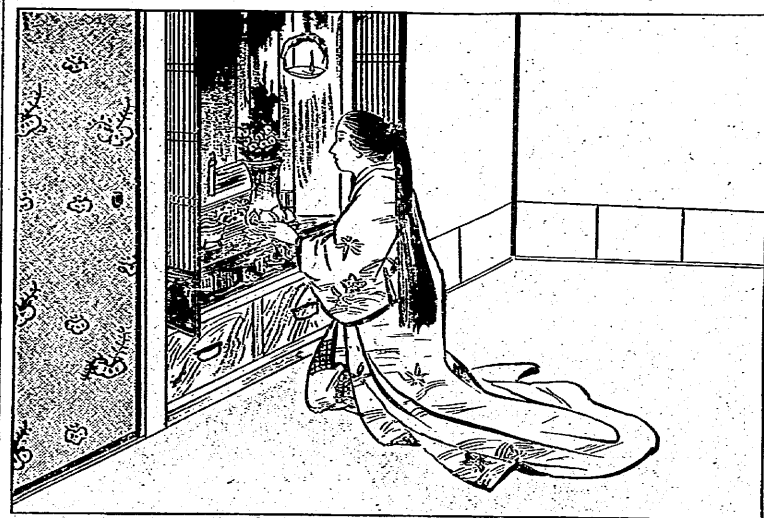
く思ひます。』といつて、べつに白いまりを出して鶴臺に見せました。

自分をふりかへつて見て、よいおこなひをつとめることは、はじめはくるしくても、習慣となればさほどにかんじないやうになるものです。

習性ナミセイトナル。

第十一　そせんをたつとべ

稻生いなふはるは毎月一日十五日、その外そせんの



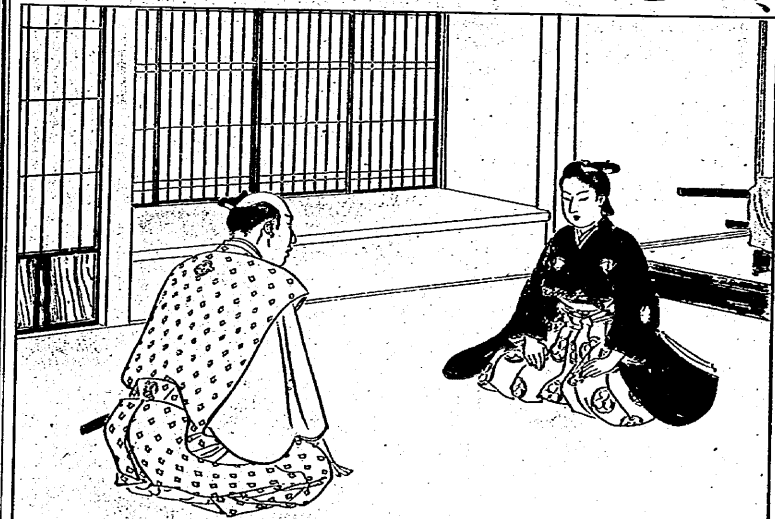
忌日きにちには朝早くからおき、からだをきよめて、ぶつだんのさうちをし、花をささげ、かうをたき、いろいろそなへ物をして、つつしんでお祭をしました。もし人からめづらしいくだものなどをもら

ふことがあるときつとぶつだんにそなへました。

第十二 ぎやうぎ

松平好房まつだいらよしふさは小さい時からぎやうぎのよい人で、自分のおまにゐてもかりそめにも父母の居られる方へ足をのばしたことはありませんでした。よそへ行く時は、そのことを父母につげ、かへつて来た時は、かならず父母の前へ出て、その日あつたことをはなしました。父母

から物をもらふ時は、
ていねいにおじぎを
してそれをうけ、いつ
までもたいせつに持
つてゐました。又人が
好房の父母のはなし
をすると、かならずぎ
やうぎよくゐなほつ
て聞きました。



シタシキ中ニモレイギアリ。

第十三 人の名譽めいよをおもんぜよ

昔京都きやうとに伊藤東涯いとうとうがいといふがくしやがありま
した。江戸えどの荻生徂徠おぎふそらいと相對あひたいして、ともにひや
うばんが高うございました。

ある日、東涯のをしへをうけて居る人が、徂徠
の書いた文を持つて來て、東涯に見せました。
その場に外のでしが二人居合はせましたが、
これを見てひどくわる口をいひました。東涯



はしづかに二人にむかつて「人はめいゝかんがへがちがふものである。かるくしくわる口をいふものではない。ましてこの文はりつばなもので、外の人とはとてもおよばないであらう。」とい

つて聞かせたので、でしどもはふかくはぢ入りました。

第十四 皇后陛下くわうじやう

皇后陛下はお小さい時から、きまりよくあらせられました。おもちひの御品は大切にお取りあつかひになり、御じしんで御せいとんになりました。又御學問や御うんどうなどの日、日の御きまりはたゞしくおまもりになつて、けつしてそれをおたがへになりませんでし



た。
陛下は又大そうおやさしくあらせられ、人々をおあはれみになりました。まだ久邇宮家（のみや）にあらせられた時、ある夏、地方に御りよかうになりました。その時大ぜいのせいがお出むかへ申し

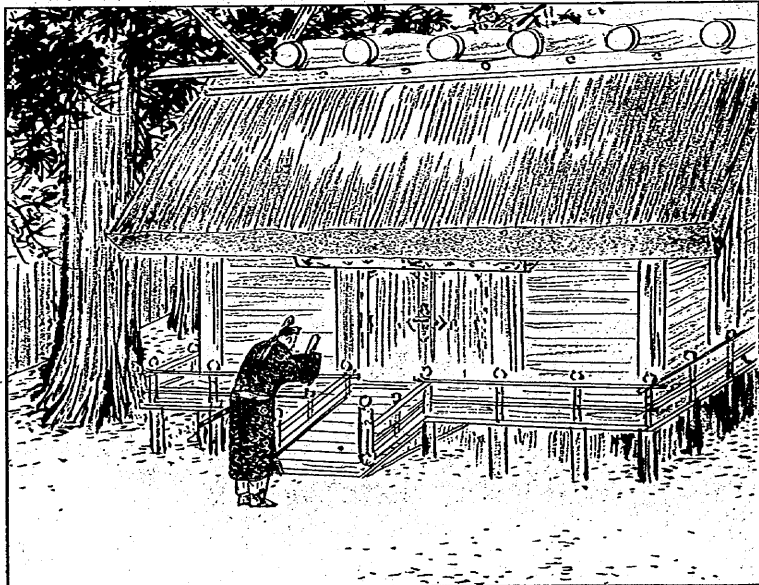
てゐるのをごらんになつて、さぞあついでせう。とおほせられて、おやさしくおいたはりになりました。又大正十二年にくわんとうに大ぢしんがあつた時、さいなんにあつた人たちを氣のどくにおぼしめされ、御じしんでたくさんさんの着物をおぬひになつて、こまつてゐる人たちにたまはりました。

第十五 皇室をたつとべ

昔和氣清麻呂（わけのきよまろ）といふちゆうぎな人がありま

三十二
した。その時道鏡だうきやうといふ僧そうが高いくらゐにゐ
ましたが、道鏡にへつらふ者が、時の天皇に「う
さはちまんの神が、道鏡を天皇の御くらゐに
つけたなら、天下太平たいへいであらうと御をしへに
なりました。」と申し上げました。天皇は大そう
御しんばいあそばされて、清麻呂に「うさへ行
つて今一度神の御をしへをうけたまはつて
まゐれ。」と御いひつけになりました。
道鏡は清麻呂をよんで「自分が天皇になれた

なら、おまへに高い
くらゐをさづけよ
う。」と申しました。清
麻呂はうさへ行つ
て神の御をしへを
うけ、やがて歸つて
来て、天皇の御前へ
出て、道鏡の聞いて
居るのもおそれず、



「臣下のみぶんで天皇の御くらゐをのぞむやうな者は早くのぞけと、おつげになりました」と申し上げました。

第十六 能久親王^{よしひさしんのう}

能久親王^{北白川宮}は明治二十八年五月臺灣^{たいわん}のぞく軍を御せいばつなさるために、かの地へおわたりになりました。おつきになつても、おやすみになるやうな家がないので、砂の上にくをはり、そまつないすをおいて御座所^{ござしよ}とし

ました。又御

しよくじにはきつまいものむしやきをさし上げました。

それからだんく

軍をお進めになり

ましたが、へいしとともに

に大そう御なんぎをな

され、御病氣におなりになつても、少しもおい



といなされずおさしづなさいました。

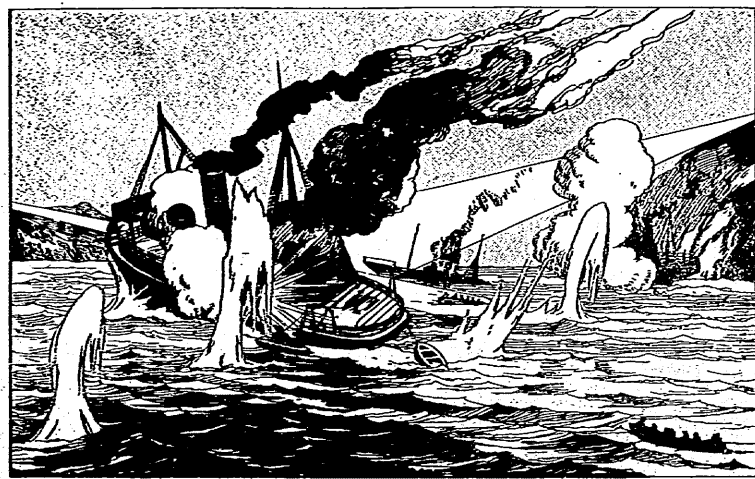
ぞくはたいていたひらぎましたが、南の方にまだのこりのぞくがゐましたので、その方へお進みになりました。そのとちゆう、又御病氣におかゝりなさいました。ぐんいは「おとゞまりになつて御やうじやうあそばしますやうに。」と申し上げましたが、親王は「わがみのために國の事をおろそかにすることは出来ぬ。いきのあるかぎりはつゞける。」とおほせられ、き

ゆうくつなかごにのつてお進みになりました。

親王はかやうに國のためにおつくしになりましたが、かなしいことには、御病氣がおもくなつて、間もなくおかくれになりました。

第十七 ちゆうくんあいこく

明治三十七年わが國がロシヤといくきをした時、わが國のかんたいは、てきのぐんかんが旅順^{リョウジュン}から出られないやうに、きせんをしづめ



て、みなと口をふさぎました。これは大そうあぶない仕事でありましたが、三度までおこなつて、思ひ通りにしとげました。それをおこなつた人たちはちゆうぎな軍人ばかりであつたから、く
らい夜中に、みなと口へ

進み、てきのたいはうのたまの中で、いさましくはたらきました。中でも海軍^{かいぐん}ちゆうき^{ひろせ}廣瀬武夫^{たけを}のはたらきはりつばなものでありました。ちゆうきはやみ夜にきせんにつて出かけました。てきのうち出したいはうのたまが雨あられのやうに降りそゞぐ中でいさましくはたらいて引上げようとしたが、杉野へいさうちやうがゐませんから、『杉野』『杉野』とよんで三度もふねの中をたづねまはりまし

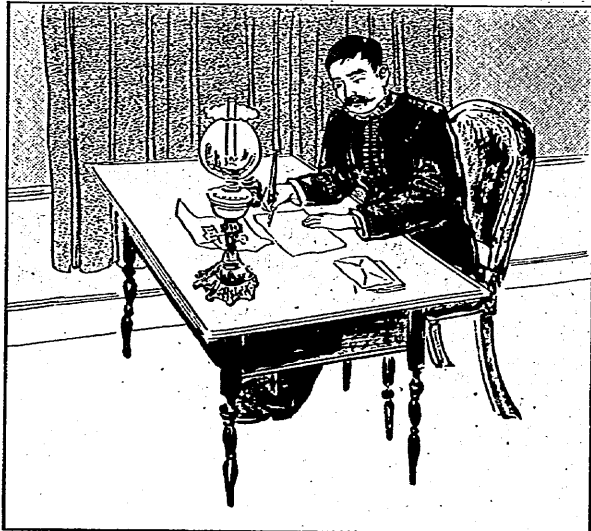
た。いよくゐないので、ボートにのつて歸りかけた時、ちゆうきはたいはうのたまにあたつてせんしをとげました。

第十八 やくそくをまもれ

廣瀬武夫がロシヤへ行く時、ある子どもに「歸りにはロシヤのいうびん切手をたくさんみやげに上げよう」とやくそくしました。

武夫はロシヤから日本へ歸る道で、大そうなんぎな所を通ることになりました。その前の

夜、武夫はやどやで「もしもぶじに歸れなかつたら、いうびん切手をまつてゐる子どもは、どんなに力おとしをするだらう。」と思ひました。それですぐにその子どもにあてた手紙を書いて、ロシヤのいうびん切手を入れ、それを自分の兄の所へ



おくつて、「もし私が死んだら、この手紙を子どもにとづけて下さい。」とたのんでやりました。

第十九 まつだちのぶつな あやまちをかくすな

松平信綱はしやうぐんのやしきではうばいとたはむれて、大切なびやうぶをやぶりました。間もなくしやうぐんがそこを通りかゝり、「これはだれがやぶつたのか。」とがめま

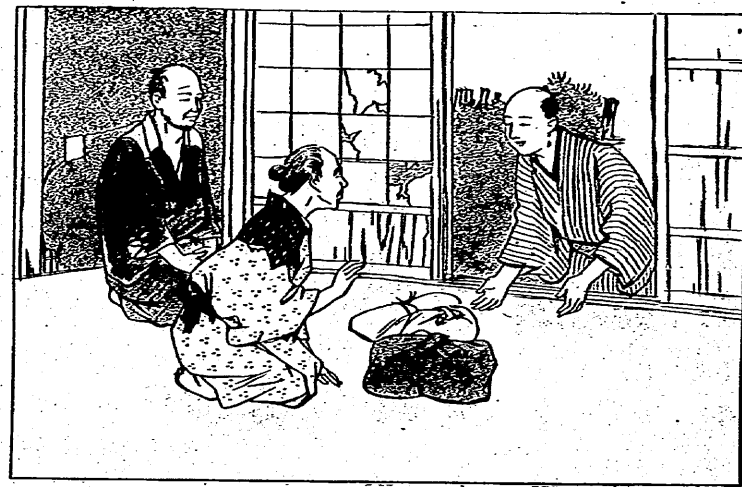


した。信綱は「私がやぶりました。」と少しもかくさず申し上げておわびしますと、しやうぐんはかへつて信綱がしやうぢきであやまちをかくさなかつたのをほめました。



第二十 おんをわすれるな

永田佐吉は十一の時美濃の竹鼻から尾張の名古屋へ出て、ある紙屋にほうこうしました。佐吉はしやうぢき者で、よくはたりますか。らしゆじんにかはいがられてゐました。又ひまがあると學問をしてたのしんでゐました。はうばいの者どもが佐吉をねたんで店から出してしまふやうにしゆじんにせまりました。しゆじんはぜひなく佐吉にひまをやりました。



佐吉は家に歸つてから、なかゞひなどをしてくらしを立ててゐましたが、しゆじんのおんをわすれないで、道のついでには、きつとたづねて行きました。その後紙屋はおとろへましたが、佐吉はをりく見まつて、物

をおくり、くらしのたすけにしました。

第二十一 法令ほうれいをおもんぜよ

昔ギリシヤの大がくしやソクラテスはいろ
いろ國のためにつくし、又わかい人たちにた
だしい道ををしへました。ところがソクラテ
スをにくむ人々にう
つたへられて、とうと
う死けいをいひわた
されました。でしのク



リトンはらうやへめ
んくわいに行き、つま
もないのに死ななけ
ればならないだうり
はありません。今、らう
やをにげ出すしかた
があるから、すぐにおにげなさい。』といつて、し
きりにすゝめました。ソクラテスは「自分は今
まで國のためになんていい道をふんで来たか



ら、今になつてそれをやぶることは出来ない。
 國法こくはふにそむいて生きてゐるよりも、國法をま
 もつて死んだ方がよい。』といつて、おちついて
 ゐました。

第二十二 共同きょうどう

ある時毛利元就まうり もとなりはその子の隆元たかもと、元春たかかげ、隆景の
 三人に一つの書き物をわたしました。その中
 に、『三人とも毛利の家を大切に思ひ、たがひに
 少しでも、へだて心をもつてはならぬ。隆元は



二人の弟を愛し、元春
 隆景はよく兄につか
 へよ。』とありました。又
 隆元へべつの書き物
 をわたして、『あの書き
 物をまもりとして、家
 のさかえをはかれよ。
 とねんごろにいまし
 めました。それで、兄弟

は一しよに名を書きならべた請書うけしよを父にさし出し、三人共同して、御いましめをまもります。とちかひました。

その後隆元は早く死んで、その子の輝元てるもとが家をつぐことになりましたが、元春隆景はよく元就のいましめをまもり、心をあはせて輝元をたすけたので、毛利家は長くさかえることになりました。

第二十三 こうえき

昔羽後うごの海べの村々では、暴風ばうふうが砂を吹きとばして、家や田をうづめることがたびゝありました。栗田定之丞くりたさだのじやうといふ人がある郡の役人であつた時、その害がいをのぞかうといろゝくふうしました。まづ海べの風の吹く方に、わらたばを立てつらねて砂をふせぎ、そのうしろに、やなぎや、ぐみの枝をさゝせましたら、皆めをふくやうになりました。そこでさらに松の苗木なへをうゑさせました。それがしだいに大

きくなつて、つひにり
つばな林になりました
た。

その後定之丞は外の
郡の役人になりました
たが、そこでもこの事
を土地の人にすゝめ
ました。はじめははげ
しいはんたいをうけ



たけれども、いろ／＼とさとし、自分がさきに
立つてはたらいたので、また松林がしげるや
うになりました。

定之丞は十八年の間もこの事にほねををり
ました。そのために風や砂のうれへがなくな
つて、^{あは}粟などののはたも所々にひらけ、又しよ
うろやはつだけでも生ずるやうになりました。
この地方の人々は今日までもそのおんをあ
りがたく思ひ、定之丞のために粟田神社とい

ふ社やしろを立てて、年々のお祭をいたします。

第二十四 じぜん

昔羽前うぜんの鶴岡つるをかに鈴木すずき今右衛門いまえもんといふじぜんの心のふかい人がありました。大き、んのあつた時、田はたをはじめ家のだうぐまで賣つて多くの人をたすけました。今右衛門の妻も心だてのよい人で、ほどこしをするために、着物るゐを賣りはらひ、はれ着が二枚だけのこつてゐましたが、着がへがなくなつて外へ出

ることが出来なければ、くしや、かんざしの入用もあります。これらの物を金にかへてもつと多くの人をたすけませう。といつてはれ着とともに、くしかんざしも、皆賣つてしまひました。



今右衛門ふうふに十二になるむすめがありました。あるさむい日おなじ年ごろの女の子が物もらひに來ました。母はそれを見て、むすめに「あの子はひとへ物一枚でふるへてゐます。おまへの着てゐるわたいれを一枚やつてはどうです。」といひましたら、むすめはすぐに上に着てゐるよい方のをぬいでやりました。ワガミヲツメツテ人ノイタサヲ知レ。

第二十五 よい日本人

われらはつねに天皇陛下くわうぎやう皇后陛下の御おんをかうむることのふかいことを思ひ、皇室をたつとび、ちゆうくんあいこくの心をはげみ、法令ほうれいをおもんじ、君のため國のために、臣民しんみんのつとめをつくさなければなりません。

又おやのおんのふかいことを思ひ、父母に孝行をつくし、そせんをたつとび、兄弟なかよくし、しんるゐの人によくまじはらなければなりません。

友だちにはしんせつにしてたすけあひ、人にまじはるには、人の名譽めいよをおもんじ、きやうぎをよくし、あやまちをかくさず、やくそくをまもり、人からうけたおんをわすれず、人と共同きょうどうし、こうえきに力をつくし、じぜんの心もふかくなければなりません。

その外、學問にせい出し、めいしんにおちいらないやうにし、身體しんたいのけんかうに氣をつけ、仕事をはげみ、よい習慣しふくわんをつくらなければなり

ません。

われらは上にあげた心えをまもつてよい日本人とならうとつとめなければなりません。けれどもよい日本人となるには、多くの心えを知つて居るだけではなく、至誠しせいをもつてよく實行じつかうすることが大切です。至誠から出たものでなければ、よいおこなひのやうに見えても、それは生氣のない造花ぞうくわのやうなものです。

をはり

V.B. 1

昭和八年二月廿二日 印刷
昭和八年二月廿五日 發行

(非賣品)

著作權所有

著作
者兼
發行

文 部 省

印刷者

大 橋 光 吉

東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所

共同印刷株式會社

東京市小石川區久堅町百八番地

